２０２４年１２月８日　青戸教会　説教「キリストへの不信」　高橋克樹牧師
聖書　イザヤ書５９章１２～２０節、マタイ福音書１３章５３～５８節

本日の聖書個所は、イエスが故郷であるナザレで神の子としてだけでなく、預言者としても受け入れられないことを記した個所です。イエスはユダヤのベツレヘムでお生まれになりましたが、母マリアとその夫ヨセフとともに、ガリラヤのナザレで育ちました。ガリラヤはイスラエルの北部にある町で、異邦人との交流も多くて、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれていて、正当的なユダヤ人から見れば、辺境の地であり、差別されていた土地柄でした。

イエスはこのナザレで青年時代を過ごしていたのですが、若い青年たちと一緒になって、律法を学ぶ自主的な勉強サークルのような学びの集まりをしていたのでしょう。その学びの中で、律法学者やファリサイ派の独善的な律法解釈とは違う、神理解をするようになっていたのだと推測されます。ですから、故郷ナザレでは大工ヨセフの息子として認知されていて、イエスの兄弟たちのことも周知されていたのです。そして、いつの間にかイエスが故郷ナザレを出て、洗礼者ヨハネに弟子入りしたのち、どうもイエスは放浪のラビのような伝道活動をしているらしいという噂話がナザレにも伝わってきていたのです。

イエスの時代には、律法について、神の御旨について弟子を受け入れながら、放浪の説教をして歩く人物が幾人か登場していました。洗礼者ヨハネもその一人で、悔い改めの洗礼を受けることが、神の意志を実現していく人間になる最も大切な通過儀礼だと主張していたのです。そんな噂話が故郷ナザレに届いていたのでしょう。ですから、ナザレのユダヤ人会堂でイエスが教えられることがわかると、故郷でイエスのことを小さいころから知っていた人たちは会堂に詰め掛けてきて、イエスの話を聞いてみたのです。すると、その教えの内容は故郷で青年たちと学んでいたころの内容を遥かに超えた驚くべきものだったのです。５４節にあるように「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう」といぶかったのでした。実際に聞いてみると、これまでのユダヤ人の教えと比べてはるかに素晴らしい内容のことを語るのです。人々は心底驚きました。

ユダヤ人の会堂では、旧約聖書の律法の書や預言書がヘブライ語で朗読されていました。けれども、当時のユダヤ人たちの多くはヘブライ語を理解できる人は少なく、公用語であるギリシャ語しか理解できませんでした。ですから、ヘブル語の朗読の後に、その内容をギリシャ語で解説する必要があったのです。その解説をイエスがユダヤ人会堂で行ったのでした。並行記事であるルカ福音書４章１６節以下では、イエスはイザヤ書をヘブライ語で朗読したことが記されています。そして、イエスの解説の言葉は、神の御旨に関する恵み深い言葉であったのです。それは律法学者やファリサイ派の人たちが語る神の裁きばかりを強調する脅しのような言葉ではありませんでした。おそらく、イエスの話を聞いた人々は神の御旨が自分たち人間に対する恵み深い、憐れみと慈しみに触れた言葉であったのでしょう。その驚くべき、優しく愛に溢れた神の御旨が語られたことで、故郷の人々はこれまで神の裁きで脅されてきた中で抱いてきた神の姿が、憐れみと慈しみに溢れたお方であることにびっくりしたのです。しかも、そのような愛の神の姿が目の前に提示されたことで、その新しい神認識をイエスが教えてくれたことをどのように受け止めたらよいか動揺したに違いないのです。ですから、故郷の人々は、余計に自分たちが知っているイエスが、そのような新しい教えを語っていることが信じられなかったのです。

それは、ナザレという異邦の町で育った自分たちと同郷の人物が、律法学者やファリサ

イ派の人たちとは全く違う、憐れみ深い神の姿を教えてくれていることに、思わず反発してしまったのです。これまで、自分たちが異邦人との関わりがあるために、神の憐れみから漏れていると脅されてきたのとは真逆の、憐れみ深い神の素顔をイエスが教えてくれていることをうれしく思う反面、自分たちが神の恵みに漏れてはいないことをイエスが自信たっぷりに語ってくれたことで、語られた内容を信じたい気持ちがある一方で、それを自分たちと小さい時から一緒に育ってきたイエスの口から語られたことに戸惑いを隠すことができませんでした。

もしかしたら、イエスが故郷ナザレで育っていないならば、別の反応が起こっていたようにも考えられます。下手に小さい頃のイエスのことを知っているので、イエスがいつの間に神に対する驚くべき話をするようになったことが信じられなかったのです。しかも、これまで聞かされていたガリラヤの住民に対する律法学者たちの侮蔑に満ちた裁きの言葉ではない、赦された者として生きることの喜びに満ちた言葉を聞いたために、故郷ナザレの人々はイエスのことが受け入れられなかったのです。

けれども、イエスが故郷で受け入れられなかった話は、２０００年前のナザレで起こっただけの出来事ではないのです。私たちも自分の周りでキリスト教信仰の話をするときに、同じような周囲の反応にさらされることがないでしょうか。キリスト教信仰の家庭に育った者も、必ずしも信仰に入るとは限らないのです。家庭がキリスト教信仰であっても、日本のようにキリスト教が絶対的少数者である環境では、自分の家庭を離れれば、自分の家庭が日本では異教徒であるように感じてしまいます。それは、この世の中で生きていけば、自分の信仰が理解されずに、受け入れられない場面が成長するにつれてどんどん増えてきます。この意味で言えば、故郷で受け入れられないイエスと同じような場面に接することになるのです。そのようなときに問題なのは、自分自身の信念が受け入れられないことに目を向けるのではなく、自分が信じる神がどのようなお方であるのかを十分に考えることです。私たちが信じる神はイエスが教えてくださった神の姿です。もちろん、旧約聖書で示されたイスラエルの神なのですが、その神の姿は歴史の中で様々に変容して伝えられてきました。けれども、イエスがその分裂した神像を根本的に立て直したのです。罪ある者は神から遠いという裁きの神理解が主流であったイエス当時のユダヤ教の神理解は間違っていることを、癒しの業と奇跡に業によって示し、その言葉によって憐れみ深い、慈しみの神の姿を私たち人間に対して語り伝えたのです。その根本的な神の姿勢は、罪ある者を赦すところから始めるということです。慈愛の神は赦して人を受け入れたうえで、明日に向かって「赦された者として生きていく」ことを私たちに勧めているのです。

許されて生かされていることを自覚しているならば、他人を裁く意識から遠いところを歩んでいくことができます。イエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたことは歴史的な事実でありますけれども、それは神によって赦されることの重要性を認識していたからです。けれども、赦された者として生きることが神の導きであると自覚することができているならば、私たちは、どのような罪に陥ったとしても、そこから這い上がることができます。また、自らに罪の自覚がなくても、私たちは自分で気づかないところで罪を犯してしまう存在です。このように自分ではどうしようもなく罪に陥りやすい存在なのです。けれども、そのような弱さを抱えた存在だからこそ、神によって赦されて生きる道が示されていることに感謝したいと思うのです。この許されて生かされていることにナザレの人たちも気づくことができたならば、イエスのことを受け入れられたと思うのです。そして、ナザレで拒絶されたイエスと同じことが、私たちの日常生活でもしばしば起こっていることに目を向けたいと思います。その時、赦されて生かされている己の幸いを覚えることができたならば、イエスに対する不信を乗り越えるスタートラインに立っていることがわかると思うのです。